

緑の次は赤。赤の次は紫色。

次々に炸裂する煌めきを、瞬きさえ惜しんで眺めていた。一度きり、一瞬で散ってしまふ轟音の花を、一発として見逃すまいとじっと見続けている。

そこでふと思ひ起こした追憶は、陽気な喧噪に縁取られた隅田川の光景だった。河原に並んだ緑日の営み、酒とおっちゃんとチヨコバナナとキヤラクターお面とイカ焼きと河面にも屋根にも反射していた、あの色とりどりの花火。日本の夏だったと思う。まだ小学生だった時分、初めて県境を越えて旅行した夏の記憶。

美しさと楽しさだけなら、今日は、その隅田川にだって見劣りしないと早苗は本気で思っていた。

天を眺めている。

牧歌的で前時代的な幻想郷に似付かわしくない、打ち上げ花火の派手派手しさ。しかしそれ故に明確に匂い立った非日常性の薫り、つまりはハレの日に、夢見心地の胸は大人げなく高鳴って仕方がなかった。大人が一斉に、子供に戻ることを許される夜を胸一杯に吸い込む。薄い煙と火菓の匂いがした。鈍重な破裂音がお腹にずどおん、ずどおんと響く感覚が、子供時分から早苗は堪らなく好きだった。それは今も変わらぬ。天を眺めている。

「……早苗」

「なんでですか？」

「……うふふ」

「な、なんですか神奈子様、気持ち悪い」

くすくす笑いながら早苗はほんの少しだけ神奈子を見て、またすぐ頭上の花火の音に視線を誘われる。

神様と一緒に眺める花火を、存分に楽しんでいる。

博麗神社の縁日に誘ってくれた霊夢の優しさに頭を下げ、後ろ髪引かれる思いを断ち切った早苗は今年、守矢神社の神様二人と共に夏祭りを過ごすことを選んだ。新しい世界へと引越した御社で、記念すべき最初の夏くらいは、自分を選んでくれた神様と一緒に、水入らずで過ごそうと決めていたのだ。

神事の神々しさや堅苦しい格式を離れ、まるで本当の家族のように触れ合える夏の夜が心地よかった。年甲斐も気温の暑さもすべて忘れ、神様をお母さんに見立て、思い切って寄り添い甘えてみたくなる熱帯夜。

「早苗」

「だーから、なんでですか？」

「……浴衣、似合ってるね。可愛いよ早苗」

心を読まれたようなタイミング。

或いは、情に篤い殊勝な心がけに、神奈子と諏訪子以外の神様が早苗にくれたご褒美——だったろうか。

——顔がぼん、と赤い花火になる。

「……………と、とーぜんじゃないですか！ 私が着てるんですから」

——今から一年前の、それが夏の記憶。

たこ焼きもあてもんもない。ヨーヨー釣りも綿菓子も射的も無ければ提灯もランタンも祭壇もひもろぎも準備していい静まりかえった守矢神社。その、初めて見るほど暗い境内。温い風と、花火の色。

「……花火見物にはやつぱり、冷酒だな」

「ごちそーさまですー」

そんな飾りつ気のない言葉をいくつも交わし、襟元をゆるめて神様とお喋りした。人間との垣根もその日だけは越えて、心地よく夜空を震わせた破裂音をまた早苗のときめきの視線が追いついて、一瞬にして全ての言葉を忘れてやはり、天を眺めて。

「……………はあー……………」

「……………」

神奈子が実は、まるで母親のような笑顔で眺めているのにも気付かなかった。つまりはその、浴衣姿。

諏訪子が実は、そんな二人を更に横からニヤニヤと眺めているのにも気付かなかった。

つまりはその、睦まじい、人と神の団欒の一夜を。

幻想郷に来たら何だか風情もへったくれもなくなつたハイビスカス柄の袖を、汚れないよう大事に膝上へ寄せた早苗の手。

一年目の夏の終わりに、二年目の夏の約束をした。

「神奈子様、来年は……屋台の方に行きましようよ。」

神奈子様も諏訪子様も、もう堂々と、人間の前を出歩いて皆さんとお喋りできそうですし」

「そうだねえ……………」

三人の安らぎは確かに手を繋いで、違えた世界の新しい夏を、三人が三人ともが楽しんでいた。

花火の音を縫うように、閑かな夏風が吹いていた。

「私、屋台も好きなんです。だから、ね、絶対」

「……………はいはい」

最後まで、早苗ははしゃいでいた。そして夜は、子供のよう疲れ果ててぐっすりと眠つた。

そう。

神様と一緒に、あの花火にさえ手が届きそうだった。そんな待ちに待った夏祭り、その静かな夜こそが、

「……………分かった。考えておくよ」

東風谷早苗にとっての、確かな夏祭りだったのだ。